2026年10月版

医療従事者の方へ

2026年度 新型コロナワクチン接種の考え方と最新知見

～日常の診療などにお役立てください～

厚生労働省 Ministry of Health, Labour and Welfare





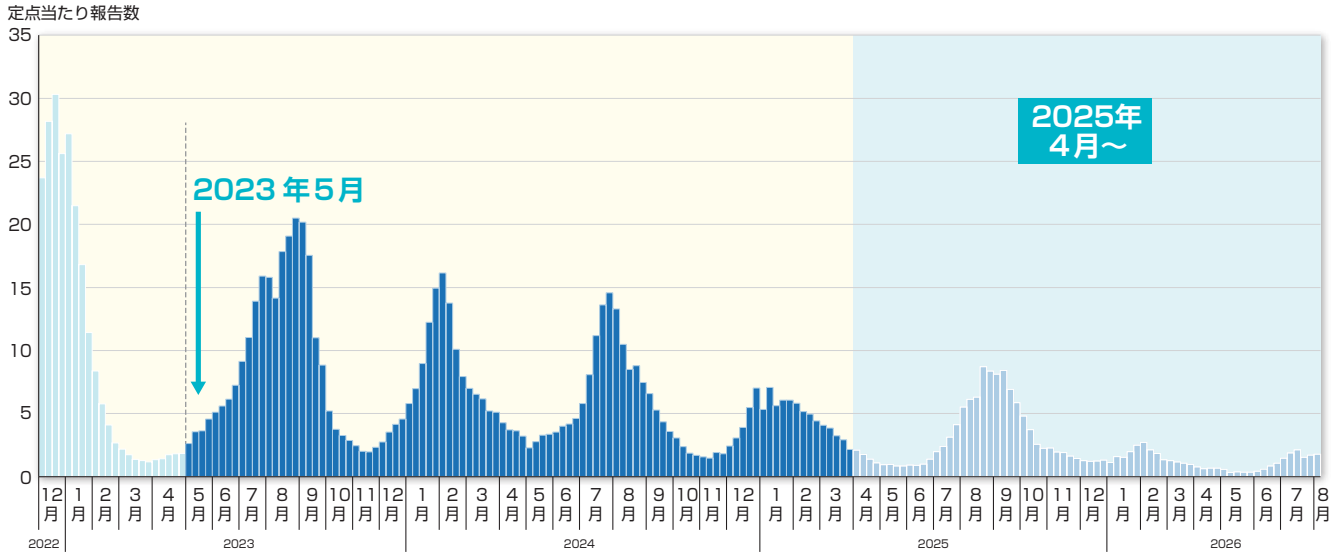
患者さんとの対話のために：新型コロナワクチン 2026年度の定期接種について

1. 新型コロナウイルス感染症の現状

●発生状況（感染者数）

新型コロナウイルスは、５類感染症に移行後も流行を繰り返しており、近年は**冬と夏に流行**を認め、**年末年始に比較的大きな感染拡大**が見られています。

新型コロナウイルス感染症定点当たり報告数（全国）推移



2023年5月：5類感染症に移行　2025年4月：ARIサーベイランス開始
出典：https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/houkokusuunosuii.html

●変異株の状況

オミクロン株は**数か月ごとに変異を繰り返し**ており、2026年7月時点では、BA.3.2系統が主流となっています。また、NB.1.8.1系統も一定の割合で検出されています。なお、ウイルス株は変異するため、最新の流行株、流行状況を確認ください。

（最新情報はこちら）https://id-info.jihs.go.jp/surveillance/idss/target-diseases/acute-respiratory-infection/weekly-report/index.html

●疾病負荷

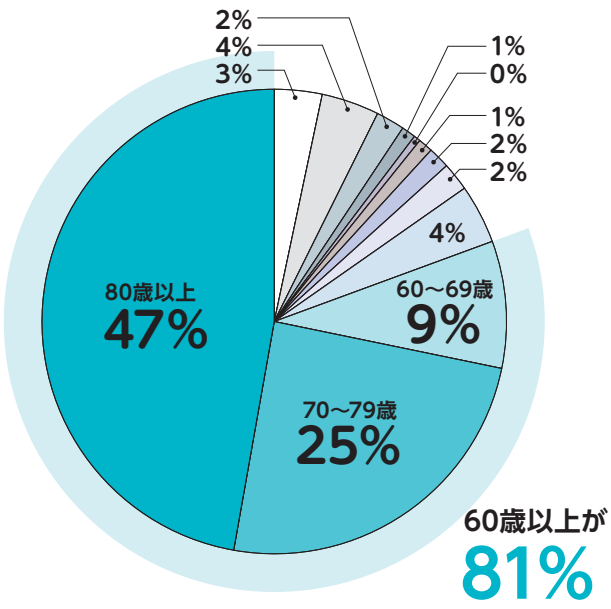
新型コロナウイルス感染症による死亡数は、2022年が約47,000人とピークでしたが、2023年が約38,000人、2024年が約35,000人、2025年は約21,500人となっています。また、その**約98%が65歳以上の高齢者となっており、80歳以上は約81%を占めます**。さらに新型コロナウイルス感染症で基幹定点医療機関に入院した患者は60代で約1,110人、70代で約3,060人、80歳以上で約5,600人となっており、80歳以上の年代で特に入院する方が多い傾向にあります。

（※）新型コロナウイルス感染症に関する報道発表資料（発生状況）2026年（2025年12月29日～2026年8月2日）

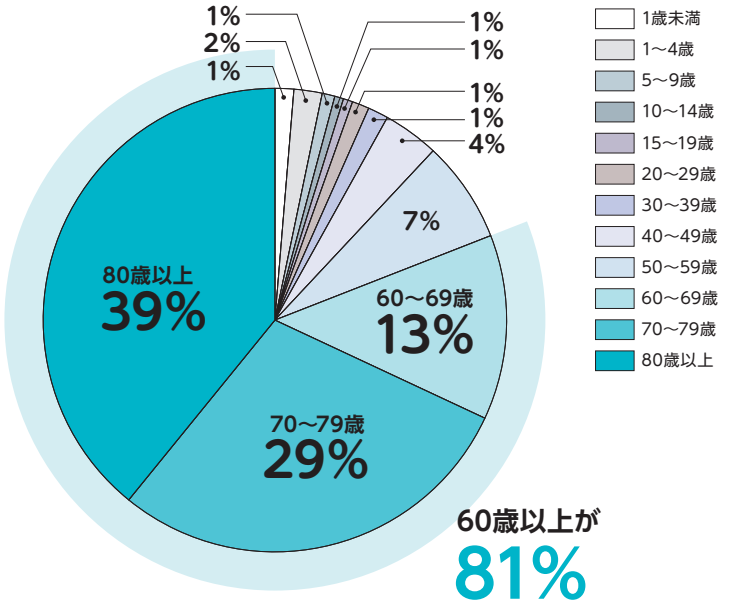
■最新情報はこちら
https://id-info.jihs.go.jp/surveillance/idss/content/teiten_ARI/index.html

■新型コロナウイルス感染症に関する報道発表資料（発生状況）
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_00086.html

■ 入院患者届出数年齢別割合



■ ICU入室患者年齢別割合



※令和7年9月22日～令和8年8月9日に入院した各患者の累計数（入院日を登録）

2. 2026年度 新型コロナワクチン定期接種の概要

●対象者・接種期間

65歳以上の方

60～64歳で

- **心臓や腎臓、呼吸器の機能に障害があり身の周りの生活を極度に制限される方。**
- **ヒト免疫不全ウイルスによる免疫の機能に障害があり日常生活がほとんど不可能な方。**

接種できる期間 **10月1日～翌年3月31日**

注）自治体によって実施期間が異なる場合があるため、詳細は、お住まいの市町村（特別区を含む。以下同じ）にお問い合わせください。

■ 使用されるワクチン

企業名	ファイザー社	モデルナ社	第一三共社	Meiji Seikaファルマ社	武田薬品社
販売名	コミナティ®	エムネクスバイク®	ダイチロナ®	コスタイベ®	ヌバキソビッド®
剤形	プレフィルドシリンジ製剤（1回分）		バイアル製剤（2回分）		
抗原組成	オミクロン株XFG	オミクロン株XFG	オミクロン株NB.1.8.1	オミクロン株NB.1.8.1	オミクロン株XFG
モダリティ	mRNA			mRNA（レプリコン）	組換えタンパク
ワクチン見込み供給量	約548万回			約52万回	約102万回
	合計 約702万回				

（参考）令和7年度の新型コロナワクチンの使用量約403万回（医療機関への納入数量を基に算出）

●他のワクチンとの同時接種

新型コロナワクチンは、インフルエンザワクチンや帯状疱疹ワクチン、高齢者に対する肺炎球菌ワクチンと同時接種が可能です。

3. ワクチンの有効性

国内外の複数の報告において**入院予防効果・重症化予防効果・発症予防効果等が示されています**。入院予防効果について、国内の知見として、60歳以上の方では、2024/2025シーズンのワクチン（JN.1系統対応）により、入院するリスクが63.2%減少したことが報告されています。また、海外の知見として、65歳以上の方では、2025/2026シーズンのワクチン（LP.8.1系統対応）により、入院するリスクが60.6%減少し、新型コロナウイルスに関連して死亡するリスクが70.1%減少したことが報告されています。接種後の効果の持続については、国内の知見として、2024/2025シーズンのワクチン（JN.1系統対応）を接種しなかった場合と比較して、接種から約6か月後にあたる2025年4月から9月の期間においても、60歳以上の方の入院するリスクが72.1%減少したことが報告されています。

出典：VERSUS Study 第12報、MMWR. 2025;74:73-82

入院予防の有効性に関する研究（VERSUS Study）

研究内容：2024年10月1日から2025年3月31日の間に11都府県11か所の病院において、急性呼吸器感染症を疑う症状を呈して入院した60歳以上の患者を対象に、検査陰性デザイン(test-negative design)を用いた症例対照研究。

結　　果：60歳以上におけるJN.1系統対応1価ワクチン接種の入院予防効果は、JN.1系統対応1価ワクチン接種なしと比較：63.2%［95%CI:14.5－84.1］、新型コロナワクチン接種なしと比較：72.9%［22.8－90.5］、従来型の新型コロナワクチンのみ接種と比較：57.5%［-48.5－87.9］、オミクロン対応2価ワクチン接種と比較：63.6%［-6.3－87.5］、オミクロンXBB対応1価ワクチン接種と比較：61.7%［-4.1－85.9］

出典：https://https://www.tm.nagasaki-u.ac.jp/versus/

罹患後症状に対するワクチンの有効性について

新型コロナウイルス感染症の罹患後症状は高齢者でもみられ、日常生活に支障をきたす程度の症状が3か月以上持続する人の割合が70歳以上で15.7%であったと報告されています。新型コロナワクチンには罹患後症状を予防する効果もあるという報告もあり、新型コロナワクチンを2回以上接種した人では罹患後症状の頻度が43%減少していたという海外の報告もあります。

出典：Sugiyama A, et al. Natural course of post-COVID symptoms in adults and children. Sci Rep 14(1):3884, 2024

4. ワクチンの安全性

一定の頻度で発生する副反応については、下記表またはワクチンの添付文書をご参照ください。頻度は不明ですが、重大な副反応として、mRNAワクチンについては、ショック、アナフィラキシー、心筋炎、心膜炎が報告されており、組換えタンパクワクチンについては、ショック、アナフィラキシーが報告されています。

発現割合	症状				
	ファイザー社	モデルナ社	第一三共社	Meiji Seikaファルマ社	武田薬品社
50%以上	痛み※1、疲労、頭痛	痛み※1、疲労	痛み※1、倦怠感	痛み※1	痛み※1、疲労、筋肉痛、頭痛
10%以上50%未満	筋肉痛、悪寒、関節痛、発熱、下痢、腫れ※1	頭痛、筋肉痛、関節痛、悪寒、リンパ節の腫れ、吐き気・嘔吐	熱感※1、腫れ※1、赤み※1、かゆみ※1、しこり※1、頭痛、発熱、筋肉痛	倦怠感、頭痛、悪寒、筋肉痛、関節痛、発熱、めまい、腫れ※1、しこり※1、赤み※1	倦怠感、関節痛、吐き気・嘔吐
1%以上10%未満	赤み※1、リンパ節の腫れや痛み、嘔吐、疼痛	発熱、腫れ※1、赤み※1	遅発性反応（赤み、腫れ、かゆみ、しこり、痛み、熱感）※2	かゆみ※1、下痢、吐き気、嘔吐	腫れ※1、しこり※1、赤み※1、発熱、四肢痛

各社の添付文書より厚労省において作成　※1 ワクチンを接種した部位の症状　※2 接種後7日以降のワクチンを接種した部位の症状

●安全性の評価

ワクチンは、薬事承認の段階で有効性・安全性についての知見が得られています。また、審議会(※)において専門家による定期的な評価が行われており、現時点では重大な懸念は認められないと評価されています。

(※)厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会副反応検討部会

副反応疑い報告の最新の状況について、詳しく知りたい方はこちら
https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/shingi-kousei_284075.html

5．患者さんからのご質問と回答例

患者さんから様々なご相談を受けた場合の参考例を準備しましたので、情報提供にご活用ください。

Q1 最近はコロナの話を聞きませんが、今も流行っているのですか？

A 流行の波はありますが、感染がなくなったわけではありません。データを見ると、昨年（2025年）の新型コロナによる死亡者数は約21,500人で、インフルエンザの約6,800人を上回っています。特に65歳以上の方が亡くなるケースが多い状況です。

出典：厚生労働省 人口動態調査. https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1.html

Q2 ワクチンの効果は本当にあるのでしょうか？

A これまでに使われたワクチンについて、有効性のデータが報告されています。例えば、日本の研究では、2024/2025のシーズンに使われたワクチンについて、60歳以上の方の入院を63.2%減らす効果が示されました。また、2025/2026のシーズンに使われたワクチンについて、海外のデータでは、65歳以上の方において、入院予防効果が60.6%、新型コロナウイルス関連死亡の予防効果が70.1%であったという報告もあります。これらの情報をもとに接種をご検討ください。

出典：新型コロナワクチンの有効性・安全性について https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/vaccine_yuukousei_anzensei.html

Q3 副反応や安全性が心配です。

A ワクチン接種後には、接種部位の痛み、頭痛、発熱などがみられることがありますが、数日以内で回復することがほとんどです。安全性については、継続的に評価が行われており、専門家によって現時点では重大な懸念は認められないと評価されています。

出典：厚生科学審議会（予防接種・ワクチン分科会 副反応検討部会）https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/shingi-kousei_284075.html

Q4 罹患後症状について、ワクチンとの関係はどうですか？

A 罹患後症状については、ワクチンを接種することでリスクを減らせる可能性が報告されています。複数の研究をまとめた分析では、ワクチンを2回以上接種していた人は、接種しなかった人に比べて罹患後症状が起こる頻度が43%少なかったとされています。

出典：JAMA Intern Med 183(6):566-580

6．副反応疑い報告制度

- 副反応疑い報告制度は、医師等が、定期の予防接種等を受けた方がそれが原因と疑われる症状を呈していることを知ったときに、PMDA（独立行政法人医薬品医療機器総合機構）に報告することを義務付ける制度です。
- 副反応疑い報告としてPMDAに報告された症例については、厚生労働省の審議会において、報告頻度や予防接種との因果関係を評価する等、予防接種の安全性の評価に役立てています。
- 医師等の皆様におかれましては、予防接種後の副反応疑い事例を知ったときには、適切に副反応疑い報告を行っていただくようお願いいたします。
- 詳しくは、厚生労働省ホームページ「予防接種法に基づく医師等の報告のお願い」をご参照ください。

https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou20/hukuhannou_houkoku/index.html

7．予防接種健康被害救済制度

- 予防接種の副反応による健康被害は、極めてまれですが、不可避的に生じるものですので、接種にかかる過失の有無にかかわらず、予防接種と健康被害との因果関係が認定された方を迅速に救済する制度を設けています。
  詳しくは厚生労働省ホームページ「予防接種健康被害救済制度について」をご参照ください。

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/vaccine_kenkouhigaikyuusai.html

- 日本の従来からの救済制度の基本的な考え方「厳密な因果関係までは必要とせず、接種後の症状が予防接種によって起こることを否定できない場合も救済の対象とする」にそって、救済の審査を実施しています。
- 医療機関におかれましては、制度の趣旨をご理解いただくとともに、申請を希望される方から受診証明書等の作成の相談があった場合は、円滑な申請が可能となるよう、必要な書類の作成にご協力をお願いします。

＜お問い合わせ先＞